

平成21年度基調報告

網走管内国際理解教育研究会
研究部長 佐藤文昭

1. はじめに

アメリカのサブプライム問題に端を発した世界同時株安が、日本経済にも大きなダメージを与え、賃金の低下・失業率の上昇など、わたしたちの生活にも暗い影を落としている。最近の経済面の身近な例だけを挙げてみても、ひとりひとりの生活が世界の動きとは無縁ではないことは明らかである。また、日本の食糧自給率や輸出入の現状を考えても、いまや世界とのつながりを断ち切ることができないことは周知の通りである。世界はまさに相互依存の時代に入っている。交通網、通信網の発達により、世界の距離は格段に縮まり、国と国、人と人がより豊かで協調的な関係を築くべき時代を迎えている。

しかし、現実の世界は多くの問題を抱えている。民族間の対立や宗教に端を発した紛争、世界の食糧をめぐる様々な問題、貧困や格差の問題、感染症や衛生の問題、教育やジェンダー・人権に関する問題、環境・エネルギー問題。そしてこれらは複雑に絡み合い、さらに困難な問題となっている。

このような様々な問題を解決するには、世界の人々や国々の連帯が必要となる。世界の人々との連帯を進めていくためには、将来を担う子どもたちにこそ、人と人とが共に生き協力していくに足る力を備えさせていかなければならない。地球市民として、自分と地球の未来を重ね合わせていくことのできる子どもたちを育てていくことこそ我々の第一義と考え、そのための方策を追求していくこととする。

2. これまでの研究の流れ

日常の実践活動の中で、我々は特に意識していなくても国際理解教育的な内容に触れている。しかし、そのこと（国際理解教育の考え方）を意識しながら教育活動を進めることはたいへん重要である。国際理解教育に視点が向くことで育てたい子ども像がより明確になり、目標である「地球市民」の育成に近づくことになる。

本会では「いつでも、どこでも、だれでも行える国際理解教育」をスローガンに、全ての教員が、教科、道徳、特別活動など、全ての教育活動において国際理解教育を行うことを念頭に、長年活動を

平成13年度

国際社会における人間性豊かな児童生徒の育成
～身近なものから異文化を見つける国際理解教育～

平成14年度

国際社会に生きる人間性豊かな児童生徒の育成
～身近な異文化から自分を見つめなおす国際理解教育～

進めてきた。これは今後も引き続き重要な命題であるとする。

「総合的な学習の時間」が設けられ「国際理解」が例示されたことにより、網走管内でも多くの学校で国際理解への取り組みが見られるようになった。内容的には「コミュニケーション能力」の育成を重視した、小学校英語活動などである。その中でも ALT が児童・生徒にとっての異文化理解・交流の扉という大きな役割を担ってきた。学級担任が進める英語活動についても議論が始まり、この課題は大きく現在へとつながっている。

平成17年度の本会の調査によると、網走管内小学校では国際理解教育を行う学校が増えたもののその内容は英語活動にとどまった。また中学校では「国際理解教育は英語教育が担うもの」との認識が見られた。平成13年度の調査と比べ、活動の幅が狭まったのではないかという危機感もあり、子どもたちが「身近な異文化」との関連性に気づき「世界とのつながりを求めて」いく過程を大事にして授業作りに取り組むこととした。その中からめざす子ども像である「よりよい未来のために、地球市民として、共に行動する子ども」の姿の実現をめざした。具体的には、「身近な素材を活用することによって世界と自分をつなげる活動」「国際理解教育としての英語活動」について研究を進めた。小中学校の各会員が、教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間と幅広く実践・交流し、平成19年度の北海道国際理解教育研究大会北見大会へとつなげることができた。

平成15年度

身近な異文化から、自分を見つめ、広げる国際理解教育
～総合的な学習の時間における英語活動のあり方～



平成16年度

身近な異文化から、自分を見つめ、広げる国際理解教育
～小学校英語活動と中学校英語学習の関連～



平成17・18・19年度

自ら地球にひらき、未来を切り拓く児童生徒の育成
～身近な異文化から世界とのつながりを求めて～



平成20・21年度

自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童・生徒の育成
～世界を感じる地球の子どもをめざして～

めざす子ども像

よりよい未来のために、地球市民として、共に行動する子ども

- 身近な物事と世界とのつながりに気づき、そこに内在する問題を見だし、進んで追求していく子ども
- 異なる文化の人々とも進んでコミュニケーションを図ることのできる子ども

3. 国際理解教育の目標

世界平和に向けた
共生の心の育成

自己の確立

国際理解教育がめざす目標

異文化理解

コミュニケーション
能力・表現力

平成14年度より網走管内の国際理解教育の目標を以上の4つにまとめた。特にこの4つの目標をもとに全領域を通じた学習活動を進めていくことにした。

4. 研究主題について

平成21年度 研究主題

「自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童・生徒の育成」

～世界を感じる地球の子どもをめざして～

◎主題設定に当たって

北海道国際理解教育研究協議会の第9次研究では、児童・生徒がよりグローバルな意識を持った自己を確立するとともに、自分の未来をどう生きていくかを切り拓く、その過程を研究することとなった。昨年度は1年次の研究を岩見沢で行い、初年度として意欲に満ちた様々な授業が展開された。

今年度は「仲間と共に行動する」「人や事象とのつながり」「地域とのつながり」をキーワードにしながら、「自分」「教室」「地域」「地球」をどう結びつけ行動に表していくかを研究することとなった。

網走管内でも研究主題を道協議会の第9次研究主題と重ね、網走管内の実態をもとに、サブテーマを「世界を感じる地球の子どもをめざして」とした。

◎副題について

① 世界を感じる

「違いを楽しみ、同じに驚く」子どもたちが異文化に触れる機会を持ち、それらを受容し、「異なるからこそ多様で豊かになり素晴らしい」と実感することは大切なことである。そのためには、それらの文化に対してそれぞれがしっかりとつながりを感じる必要がある。そういった意味で身近な素材を取り上げ、子どもたちの生活とさまざまな文化や人々とを結びつけていくことは、大事なことである。それらの経験を重ねることで、普段の何気ないことから、自分の生活が世界の様々なことと深く結びついていることに気づく。さらにそこから課題を発見し探求しようという気持ちが育っていく。こうして個々が主体的に世界をとらえ始める。

② 地球の子どもをめざして

自分と世界とのつながりに気づき、探求を始めた子どもたちは、積極的に関わりを求めようとする。ある者は話し・聞き、またある者は書き・読み、図や絵、ジェスチャーなど、様々な表現で関わろうとする。そういった活動を通して子どもたちは、自分自身の得意なことや良さにも気づいていくであろう。また、関わりを持つことを通して、連帯や共生の喜びを感じていくであろう。さらに、それぞれの課題を探求する中で、具体的に自分は何ができるのかということをも自分なりに考え、解決に向け何らかの行動をとろうとするだろう。

他者や世界の様々なこととの関係をつなげ広げていくことを思い、地球市民としての意識を持って、できることから行動していこうとする、そんな子どもたちを育てていきたい。

5. 研究の仮説について

仮説 1 実生活における身近な物事に目を向け、地球的視野で追求することによって、世界とのつながりを感じ、様々な問題を自分との関わりとしてとらえることができるだろう。

自分と世界の人々とのつながりを感じられるような教材作りが求められている。子どもたちの生活において身近な物事、(例えばお菓子や米、水といったわたしたちが口にする物、ゲーム機に使われている希少金属、食事の時の挨拶や祈りなどの風習や習慣、また遊びや学校の勉強などのこと)をどう教材化するかが大切である。

また、「わかる」だけでは人の行動には結びつかない。驚き、共感し、自らの課題となったとき、初めて何かをしようという思考が始まる。子どもたち各々が学びの中で感じたことが、やがて行動に向かっていくことになると思う。

仮説2 言葉を使う活動を通し、互いを尊重する態度を育てることで、進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもが育つだろう。

言葉を「人の心と心を結ぶもの」として捉えたとき、言葉を使う活動は、相手に対してどう接していけばよいかを実践的に学ぶ場でもある。受容的な態度や行動の仕方などを具体的に学ぶことで、自信が生まれ進んでコミュニケーションを図ろうとするようになる。さらに、活動の中に世界につながるトピックを入れるなどの工夫をすることにより、活動の意欲を高めることができると考える。

6. 研究の視点

視点1

- ・身近な素材をもとにした、子どもと世界とのつながりが実感できる教材の工夫。
- ・行動化を促す授業作り。

その中で異文化への尊敬の念を持ち、さらに自らの生活や生き方への振り返りと見直しをなされ、どの文化も尊重していこうとする態度を養う授業作りをめざす。

共に生きようとする態度、さらには進んで互いの（共通の）問題を解決していこうとする態度を養う授業作りをめざす。

◎ 「異文化」について

「異文化」というものの押さえについて、平成19年度の北見大会でもいくつかの分科会で話題になった。国と国との関係のみでものを見る考えや、1国1文化の発想で単に外国の文化のみを「異文化」という方もいたが、何が私たちにとって異文化で、何が自文化なのか。「わたしたち」というよりも、それはひとりひとり違うことであり、定義すること自体難しい。

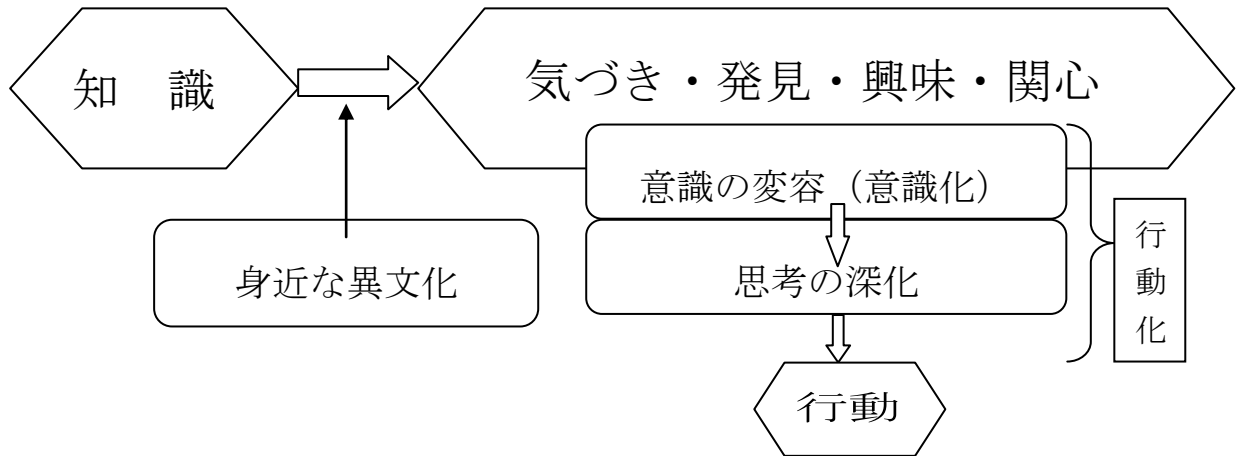
「異文化」が何を示すかは、その立場によっても違ってくる。ひとつの国に複数の民族や言語が存在する事があれば、その民族や言語を使用する人々が複数の国にまたがることもある。少なくともそういったことを踏まえた上で、どの立場からの「異文化」なのかを考えて、この言葉を使用したい。

網走管内国際理解教育目標における「異文化理解」であるが、この言葉には、「異文化とはこの文化である」というような狭い意味合いはない。それぞれにとって自分とは違うもの、考え、行動などに興味を持ち、認め、理解するということである。文言については、今後も十分検討をしていきたい。

◎ 行動化について

子ども自身の内面において「何かをしたい」という意識に向かう過程に目を向け

た。まず、子どもの中に驚きや疑問、共感を呼び起こす。その際、子どもの生活に根ざした身近な物事を通して、世界の国々といかに深くつながっているかという認識を持たせる事を鍵とした。この工夫により、実感が持ちにくい世界も、リアリティーを持ったもの感じられる。



行動に至るまでには、十分な思考をする時間とそれを促す内容が必要と考えた。その思考過程においての行動をも含めたいいくつかの行動の型について、今年度全道大会が開かれる札幌の研究会から「行動力」の押さえ、として提案があった。これらを参考にしながら「行動化」について話し合いを進めていきたい。

行動力

実践という行動力

- 今の自分が個人で容易に行動することができる力
 - ・身近な生活の中でひとつでも実践しようという姿勢を育てる。

行動へつなげる行動力

- 情報収集という行動 「もっと～を知りたい」「どうしてそうなのか」という知的好奇心を持続させるための力
- 技能習得という行動 「こんなときにこんなことができるように」という近くや遠くの未来でも実戦可能な行動力
- 提案という行動（発信）「こんなことを伝えたい。そのためにはこのように」という学習したことを他へ発信する行動力
- 参加という行動 「こんな活動があるんだ。わたしもやってみよう。」という自分の体験、意欲が参加に結びつくための行動力

将来へつながる行動力

- 自分の理想や願望を、今は実践できないが、これからできることとして意識して過ごす行動力
 - ・「地球環境を考えて、クリーンなエネルギーを開発したい。そのためには・・・」という将来につながる間接的な行動力

- 視点 2**
- ・コミュニケーション能力の素地を育む指導法の工夫。
 - ・外国語活動を通じた、世界とつながる意欲を高める教材の開発。

道協議会で提案している小学校外国語活動の基本に沿って、また学習指導要領に基づいた情報の収集に努めながら、ALTの有効活用、担任主導の小学校外国語活動のあり方を模索し実践する。さらには、小学校外国語活動と中学校外国語科との連携の可能性をさぐる。

◎小学校外国語活動についての研究

- ・国際理解教育としての外国語活動
 - 国際理解研究会としての押さえを明確にする
(異文化理解・コミュニケーション・共生の心・自己の確立)
 - 実際のカリキュラムや授業プランの交流、検討
 - 英語の必要感をどう作っていくか
- ・外国語活動情報交流

→プロジェクトチームを作り研究を進める

○全般的な研究内容・方法

- ・教科、特活、道徳、総合的な学習の時間などを利用した
国際理解教育の学習活動
- ・地域素材や身近な素材の活用
- ・地域の団体や地域の人々の活用 (JICA や留学生などとの連携)
- ・国際理解教育につながる小学校外国語活動
- ・小学校と中学校が連携した小学校外国語活動

「小学校外国語活動



プロジェクトチーム」について

(Foreign Language Activities of elementary school-Project team)

今年度は、網走管内国際理解教育研究会研究部として小学校外国語活動の研究に重点を置くこととし、本プロジェクトを発足させた。

メンバーとしては、国際理解教育研究会の会員はもちろん、さらに管内のその他の教員の方々にも参加を呼びかけ、20名を超える方々が本プロジェクトチームに名を連ねた。

本プロジェクトチームの目的は以下の通りである。

- ◎ 本研究会の柱である国際理解教育のひとつの活動である「小学校外国語活動」の研究を行い、管内の小学校外国語活動の発展に寄与する。
- ① 今年度から移行措置として小学校に導入され、実際に行った授業における、小学校教師の悩みを解決したり、問題点を追求したりする。
- ② チームメンバーが実際に授業をしたり、他の教師の授業を見たり、研究会や書籍等で学んだことを交流する。
- ③ 本研究会の公開研究会等に関わる外国語活動の授業を作り上げ、授業公開を行い、広く管内に発信する。
- ④ 「小学校外国語活動」の研究を進めながら、中学校における「外国語」との連携を図り、より望ましい活動を追求する。
- ⑤ 管内教師の明日からの授業に生かせるよう、本チームの活動をホームページなどで広く発信する。

現在までの歩みと今後の予定

- ・ 6月27日(土) 第1回ミーティング 会の立ち上げ
- ・ 7月25日(土) 第2回ミーティング 公開研究会に向けて
- ・ 9月4日(金) 本日 公開研究会
- ・ 10月(未定) 第3回ミーティング レポート交流
- ・ 12月(未定) 第4回ミーティング 反省・次年度に向けて

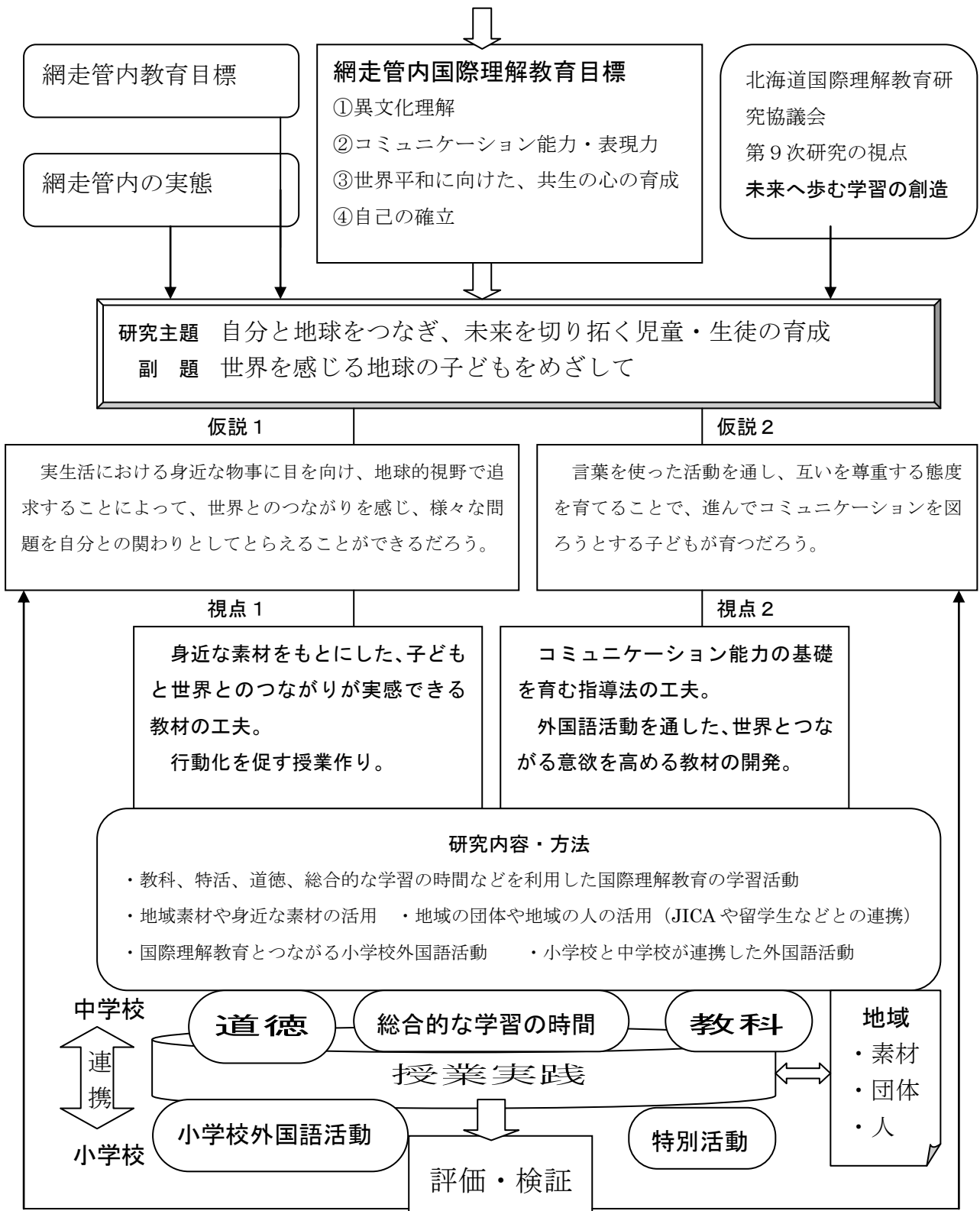
お知らせ 10月のレポート交流から、一緒に活動してみませんか？
・A4 2ページ(表裏)程度で、内容は小学校外国語活動に関することなら何でもOKです。見学だけでも歓迎します。日程・場所等については決まり次第連絡しますので、興味のある方は研究部、吉本・佐藤までご連絡ください。

7. 網走管内国際理解教育の研究構造図

めざす子ども像

よりよい未来のために、地球市民として、共に行動する子ども

- 身近な物事と世界とのつながりに気づき、そこに内在する問題を見いだし、進んで追求していく子ども
- 異なる文化の人々とも進んでコミュニケーションを図ることのできる子ども



8, 公開授業との関連

網走市立南小学校 高田 佳奈 教諭

単元名「買い物をしよう（関連：英語ノート1 Lesson5 いろいろな国の衣装を知ろう）」

視点2・目的意識を持って関わり合う外国語活動

- ・外国語での買い物表現を生かした、意欲を高める活動

この単元は、英語ノートの Lesson 5 に出てくる買い物表現を、より目的意識・相手意識がはっきりとするように、食べ物の材料を買う活動に作りかえたものである。客の立場でも店員の立場でも、子どもたちがすすんでコミュニケーションをとりたいと思えるような活動にしたいという思いで授業を組み立ててきた。

クラスの実態として、外国語活動においては、友達やALTと1対1でコミュニケーションをとるのが楽しいようである。担任も、間違いを恐れず、「伝わればいいよ」と声をかけてきた。仲の良い子とだけではなく、誰とでもコミュニケーションできる活動をめざし、いろいろな相手と関わり合う仕掛けを考えてみた。

小グループごとに考え、支え合いながら、どのようにコミュニケーションをはかって活動を進めていくかが見どころである。